和歌山大学クロスカル教育機構研究紀要 第4巻 2023年3月 翻訳 130-154

英国詩人マイケル・フィールドによる サッフォー詩集『とおい昔に』 ― 日本語翻訳と解説 （その１）―

Long Ago, A Collection of Sapphic Poems Written by Michael Field ― A Japanese Translation (1) ―

滝口智子
Tomoko Takiguchi [1]

Abstract

Michael Field is the collective pseudonym used by two late 19th century female British poets, Katharine Harris Bradley and Edith Emma Cooper. They were inspired by the ancient Greek poet Sappho's surviving fragments of verse, and extended some of them into complete poems in English. Their first collection of poems, *Long Ago* (1889), explores Sappho's days spent with "fair maidens", playing the lyre and singing, and her unrequited love for a young man named Phaon. Here I offer a Japanese translation of the preface and of twelve of the poems.

キーワード/keywords：
マイケル・フィールド、サッフォー（サッポー）、英詩人、古代ギリシャ詩人、『とおい昔に』
Michael Field, Sappho, English poets, Ancient Greek Poet, *Long Ago*

１．はじめに／解題

マイケル・フィールド（Michael Field）は 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて活躍した英国詩人である。男性の筆名をもつが、その作品は女性二人 ― キャサリン・ハリス・ブラッドリー（Katharine Harris Bradley, 1846-1914）と姪のイーディス・エマ・クーパー（Edith Emma Cooper, 1862-1913）― による共作だった。二人の、Michael Field の名義として初めて

の詩集『とおい昔に』（*Long Ago*, 1889）は、古代ギリシャ詩人サッフォー（サッポー）についての、当時の文献学的研究の成果からインスピレーションを受けて創作された[2]。少数の発行部数ながら、ロバート・ブラウニング、ウォルター・ペイター、ジョージ・メレディスをはじめとする著名な詩人・作家に読まれ、高い評価を得ていた（Cantillo-Lucuara 2021a: par.1）。その後、彼女たちの他の多くの著作とともに忘れられていたが、1990 年代、現代の研究者たちによって再発見された。今日マイケル・フィールドは、世紀末の審美的な詩学に寄与した詩人として注目されている（Cantillo-Lucuara 2018, 2021a: par.1, 2021b: par.2）。

サッフォーは、詩女神（ムーサ）の島として知られ、すぐれた詩人を輩出していたレスボス島に生まれ、紀元前 7 世紀後半から 6 世紀中頃にかけて生きた実在の詩人・音楽家である。情熱的な愛の詩の作者であり、竪琴を弾き、愛の喜びや苦しみをうたった。レスボス島で少女たちに詩、音楽、舞踏、家政を教えていたと言われる。サッフォーが少女たちと共に過ごした、そのコミュニティの性格については、資料が少なすぎるため正確なところはわからない。学校や私塾のようなものか、祭祀に従事する目的であった可能性もある。いずれにせよ、詩歌と舞にすぐれたサッフォーを慕い、各地から少女たちが集まっていたと推測される（沓掛 1988: 242-65）。

その生涯については、三人の兄弟がいたこと、夫との間にクレイスという名の娘がいたらしいこと、政治的抗争や内紛に巻き込まれ、数年間シチリア島で流謫の生活を送ったこと等を示す資料はあるが、その他に確証できることは少ない。詩作品の多くは長い年月の間に失われた。古代ギリシャ・ローマの作家たちによる引用を通して、断片的に伝わるのみである。音楽と舞については、どのようなものだったか全くわかっていない（沓掛 1988: 207-40）。サッフォーは若者ファオーンに恋したが、その思いはかなわず、傷心のあまりレフカスの崖から身を投げたという伝説が流布していた。しかしそれはローマ詩人オヴィディウス（Ovid, 43 BC – 17/18 AD?）をはじめとする後世の作家の作った物語であり、事実ではない（沓掛 1988: 298-313）。ファオーンはギリシャ神話に登場する、女神アフロディーテに愛された渡し守である。

1885 年、イギリスの古典学者ヘンリー・ソーントン・ウォートン（Henry Thornton Wharton, 1846-95）が、サッフォーについて僅かにわかっているこうした伝記的事実と、サッフォー詩の英語翻訳をまとめ、『校訂版サッフォー』（邦訳はない。原題 *Sappho: Memoir, Text, Selected Renderings and a Literal Translation*）を出版した（以下、ウォートン版と記す）。マイケル・フィールドはこの書物に感銘を受けて、ここに掲載されたサッフォー詩の断片（多くは数行や短いフレーズ）を、自らの想像力で膨らませ、新たな詩編として完成させて、一冊の詩集にまとめたのである。

なお、今日、サッフォーについて、ウォートンとマイケル・フィールドの時代よりもはるかに多くのことが明らかになった、とは言えない。それでも、19 世紀末から進んだ考古学調査の成果により、パピルスが発掘され、サッフォー詩の新しい発見が続いている。パ

ピルスの損傷は激しく、それらの発見もやはり断片である。こうした資料の解析・研究が今も進行中である。邦文と英文のサッフォーに関する現代の文献を、参考文献にいくつか挙げた。サッフォー詩の日本語訳と評伝に、沓掛良彦（1988）『サッフォー　詩と生涯』がある。英文でコンパクトにまとまった訳詩集に Jim Powell (2019) がある。2023 年に Rayor and Lardinois による *Sappho: A New Translation of the Complete Works*（2014 年初版の改訂版）が出版され、2004 年、2014 年に発見された、サッフォー詩を含むパピルスの埋蔵文化財所有権にまつわる問題点にも触れている。

マイケル・フィールドの描くサッフォーは、基本的に、彼女たち自身のギリシャ神話・文学への造詣にも依拠しつつ、サッフォーの原詩を尊重し敷衍したものである。サッフォーの詩が断片ではなく完全な形で今に残っていたら、あるいはこうだったのではないか、とも思わせる仕上がりとなっている。詩集は全体として、ひとつのゆるやかな物語を、その輪郭のようなものを、浮かび上がらせて、サッフォーをいまに蘇らせる。ただ、その「物語」を作る過程で、マイケル・フィールドが独自にサッフォー詩に付け加えた要素がある。それは、サッフォーの異性愛である。

イギリスにおいて、ウォートン版の出版以前は、サッフォーの詩に描かれる愛の対象は、（おそらく故意に）男性として英訳されることが多かった（滝口 2010b: 152）。しかしウォートンは、ギリシャ語の原文通りに、サッフォーの愛の対象を女性として翻訳・紹介した。これにより、サッフォーが同性愛を描いたことが周知されるようになった。現存するサッフォー詩において、サッフォーが明確に愛の対象として男性に呼びかける個所を見つけるのは難しい。あるいは未発見の作品の中にあるかもしれないが、推測の域を出ない。

マイケル・フィールドはウォートンにならい、サッフォーの愛の対象を乙女たちとしている。しかしそれと同時に、サッフォー伝説における、男性であるファオーンへの愛情をも描いている。古代ギリシャにおいて、同性愛と異性愛は互いに相容れないものではなかった。それゆえ、実在の詩人サッフォーが男性への愛情と女性への愛情を両方うたっていたとしても、驚くことではないとされる（Rayor 2023: 9-10）。それにしても、ウォートンが「伝説（虚構）である」と明記しており、サッフォーの詩にも全く描かれていない、サッフォーのファオーンへの愛を、マイケル・フィールドがわざわざ『とおい昔に』の詩編に詠みこんだ、そこにはどんな誘因があったのだろうか。

その問いに対する答のひとつは、英詩の伝統である。オヴィディウスは『名婦の書簡』（*Epistulae Heroidum*, or *Heroides*）所収の「サッフォーからファオーンへ」という詩編で、失恋の悲しみを切々とうったえる身投げ直前のサッフォーを描いた。18 世紀初頭にアレクサンダー・ポープ（Alexander Pope, 1688-1744）が、この作品を英語韻文に翻訳した（“Sappho to Phaon”, 1712）。崖の上で竪琴を手に最期の歌をうたう詩人のイメージは人々の想像力を刺激し、19 世紀にかけて、作家や画家・イラストレーターによる多くの作品を生んだ（滝口 2010a: 93-94）。メアリ・ロビンソン（Mary Robinson, 1757-1800）はポープにこたえるように、

『サッフォーとファオーン』（*Sappho and Phaon*, 1796）と題したソネット集を発表している。その後もフェリシア・ヘマンズ（Felicia Hemans, 1793-1835）、レティシア・ランドン（Letitia Landon, 1802-38）、クリスティナ・ロセッティ（Christina Rossetti, 1830-94）など多くの詩人が、サッフォーの悲恋を題材に詩作をした。こうした伝統のなかで、愛に悩むサッフォーの姿は少しずつ改訂されている。女性詩人のありかたや、男性とのかかわりについてのとらえ方が、時代ごとに、また詩人ごとに変容していく様子が、映し出されているのである（滝口 2010a: 95-99）。マイケル・フィールドはそのような伝統に与しつつ、マイケル・フィールドとしての、サッフォーの異性愛（悲恋）を描いたのだろう。

もうひとつの答えは、同性愛を描くための布石である。マイケル・フィールドの時代のイギリスでは、まだ、レズビアンという言葉が同性愛を意味するものとして明確に定着していなかった。女性同士の愛情については、友愛、親子や姉妹の愛などが描かれたが、それ以外の表現がなかった[3]。そのような時代にあって、彼女たちは、いわばまだ「名前のない愛」を、異性愛と共に描き、ときに対比させたり関係性を探ったりすることで、模索していたのかもしれない（滝口 2010b: 150-54）。Cantillo-Lucuara が、『とおい昔に』を論じる際に、仏哲学者リュス・イリガライによる、男性性を女性自身や女性同士の結びつきを分断するものとする指摘に言及していることが、思い起こされる（Cantillo-Lucuara 2018: 216）。

『とおい昔に』は、古代ギリシャ詩人サッフォーを語り手として、サッフォーと乙女たちとの愛と詩歌の日々を描く。それは同性愛と異性愛を織り込みつつ、無垢な少女時代とその日々（処女性）が、異性愛との出会いによって遠く去ってゆく様を、ひとつのゆるやかな物語として表現する。その物語の一端でも紹介できればとの思いから、本稿では、翻訳する対象として、マイケル・フィールド自身による序文と、70 の詩編の中の 12 編を選んだ。今後続けて『とおい昔に』の他の詩編を翻訳することを見越し、本稿の表題に（その１）と付した。

翻訳の底本は Michael Field, *Long Ago* (1897) である。詩集の中でマイケル・フィールドは、サッフォーの原詩（断片）をギリシャ語のまま引用し、各詩編のエピグラフ（題辞）とした。多くの場合その英訳（ほぼ、ウォートンによる英訳に基づく）で各詩編を始めて、残りの部分を独自に創作している。それらの題辞は、本翻訳においてもギリシャ語原文を挙げ、日本語訳を添えた。12 の詩編の日本語訳の後に、各詩編についての解説と注を置いた。

なお、題辞を日本語に翻訳するにあたり、ウォートンの英訳からの重訳を行い、沓掛良彦氏によるギリシャ語の原詩からの翻訳『サッフォー 詩と生涯』（1988）も参考にさせていただいた。ここに記し感謝いたします。

２．翻訳

Long Ago とおい昔に　　(1889 年初版)　by Michael Field　マイケル・フィールド

タイトル頁

LONG AGO

πάλαι πότα

Ἤράμαν μὲν ἔγς σέθεν, Ἄτθι, πάλαι πότα

アッティス、あなたを愛していたものでした　とおい昔に

序文

一年以上前のこと、文芸仲間である友人に、ウォートン博士の書物から受けとった喜びを英詩として表現したい、と書き送りました。彼からの返信は「なんと心躍るような、思いきった試みでしょう ― サッフォーの詩の今日に残る断片を、抒情詩として膨らませるとは。これ以上大胆なことは思いつかないほどです。」

実のところ崇拝の念とは、ひたすら偶像を崇めたてることではなく、もっと大胆なものでなければなりません。崇拝とは、その内実(イデア)をとらえ祝福を受けることだからです。サッフォー自身の言葉を用いるなら、

> *Ἔγων δ'ἐμαύτᾳ*
> *τοῦτο σύνοιδα·*
> みずからのうちに感じるのです

女神アフロディーテに対し、もがきながら、切なる願いを叶えてくれるようにと祈る、この熱く燃える古代ギリシャ詩人のように、敬虔な気持ちで私は詩人に向き合います。彼女は一貫して、恐ろしいほどの愛の熟練について語ります。私の心に何度も静かな祈りが湧きおこります ―

σὺ δ’αὕτα

σύμμαχοσ ἔσσο.

おんみずから加勢となってください

序詩

Δεῦρο δηὖτε Μοῖσαι, χρύσιον λίποισαι.

来たれ 詩女神よ 黄金造りの…

来たれ　詩女神よ、黄金造りの玉座をはなれ

来たれ　霊感あふれる瑞々しい泉をはなれ

たかき山々を　涼やかな四阿を

おん神らが治める穏やかな地をはなれ

ここちよい夏の住処と休息をはなれ

来たれ　舞いうたう乙女らよ、そしてわたしに祝福を。

第一歌

Αὐτὰρ ὁραῖαι στεφανηπλόκευν·

その頃乙女らは花輪を編んでいた

その頃乙女らは花輪を編んでいた

うつくしい青春の盛りの

　　息吹と歓喜を知っていた

至福のうちに菫の冠を編み

花輪をのせた色白の額に

　　何度もくちづけた。

その頃乙女らは花輪を編んでいた

若いアポロ神から　黄金色の

　　愛の神秘を学んだ。

竪琴が魂のしらべを解きはなち

乙女らは風にそよぐ葉の下で
　　明るい夢を追いかけた。

その頃乙女らは花輪を編んでいた　天上の花輪を！
杯に冠をのせ　青春のふかい喜びの
　　葡萄酒を飲んだ。
いま神の手に　竪琴はなく ―
だがその頃乙女らは　しらべにあわせて
　　うたい舞いつづけた。

第二歌

Ὀφθάλμοις δὲ μέλαις νύκτος ἄωρος·

暗い瞳の夜の子供　眠りよ

暗い瞳の夜の子供　眠りよ
　お前の偽り　夢を見せてほしい
象牙の角の門のさきに　昼のひかりが
　拒むよろこびを。

くちづけが欲しい
　わたしにこたえない唇から。
かき乱すことができない　あの心が欲しい
　それ以上の至福はないから。

幻影でもかまわない
　祝福されて　わたしはまどろむ。
ファオーンの唇に身を任せ
　昼の冷たい仕打ちをわすれたい。

第三歌

Μήτ' ἔμοι μέλι μήτε μέλισσα·

甘い蜜も蜜蜂もなく

甘い蜜も蜜蜂の至福もないのか
わたしほど　花を吸い尽くせる者は
いないのに？　シチリアの森にあそぶペルセポネより
情熱にかられて　はなやかな香りと
花々をもとめて　薔薇色の
夾竹桃(きょうちくとう)の木立をさまよい
銀梅花(ぎんばいか)の茂みにひそみ　アフロディーテも
蒼ざめる想いをうちあける。

蜜も蜂もないのか　疼くような
この願いまでも　うちすてるのか？
大きくひらいた黄金色(きんいろ)の花　その胸に
ふかく埋もれたい！
あつく燃える雛罌粟(ひなげし)の花輪も
菫(すみれ)の花冠も投げ捨てよう、
蜜蜂が味わう喜び　このサッフォーが
求めても得られないのか。

甘い蜜！　香(かぐわ)しく煌めく恍惚を
味わいたい　なんとしても
黄金色(きんいろ)の蜜が欲しい、
いのちのかぎり ―
神々の喜びである食事
目を奪う輝きが！
ファオーン、あなたの唇は
蜂と蜜の至福を　わたしに与えない。

第四歌

Χrύσεοι δ' ἑρέβινθοι ἐπ' ἀϊόνων ἐφύοντο·

岸辺に繁る 黄金色の豆蔓が

漁師らが小舟をつける岸辺の
砂地に繁る黄金色の
豆蔓がファオーンの足に絡みつき ―
彼はふりほどき歩き去った、
茎と黄色の花が　うち捨てられた。
逃げる者をこの腕に留めおけるのか　　もしも彼を
海から奪い盗ることができるなら
かがやく蔓のなかにそっと下ろそう、
歌の冠に留めおいて　花環にとらえ絡ませて
そしてわたしのものにする。

第五歌

Οἷαν τὰν ὑάκινθον ἐν οὔρεσι ποίμενες ἄνδρες
πόσσι καταστείβοισι, χάμαι δέ τε πόρφυρον ἄνθος

風信子が山あいで 牧人らに踏みにじられて
むらさきの花が 地に押しつぶされて

風信子が山あいで　牧人らに踏みにじられて
むらさきの花が傷つき
　　地に押しつぶされて
こなごなになって　二度と立ちあがれず
夏のひかりのなか　生まれたばかりで
　　くちはてる。
昨晩の夜露にしっとり濡れて
あたらしく　香りたかく
花ひらいた朝に　草原を
踏む足に砕かれて　死をむかえる。

わたしの心もそのように　あなたの
勝ちほこる嘲りに踏みにじられ
　　絶望をかくせない。
ああ　ファオーン　この胸の苦しみ、
どれだけ涙を注いでも
　　癒すことなどできない。
わたしの美しさは枯れ果てる、
五月の朝に　踏まれた花のように。
なぜわたしを沈めるのか 地中深くに ―
なぜ光あふれる命を追いやるのか　暗い死へと。

第六歌

Πάρθενον ἀδύφωνον·

きれいな声の乙女

エーリンナ　あなたは永久(とわ)に美しい
春の日の　若き花々とは違い
髪に月桂樹をいただいた
わたしたちの青春は永遠。
ピエリアの露に洗われた薔薇は
けっして枯れることがない。
薔薇がはじめて咲いたのは
オルフェウスの墓のうえ
ゆらゆら揺れる月明かり
吟遊詩人のねむる森に
あそぶ九柱(くちゅう)の詩女神(ムーサ)らが　愛する詩人のために
とこしえの薔薇を摘む。
女神エウテルペは　わたしの愛しい
エーリンナのきれいな声に走りより
ともに歌いながら　あの娘の頭に載せる
花冠を編んだ。

第七歌

Μή κίνη χέραδας·

うめく砂地の

岸辺に着けば　うめく砂地の
　こころを騒がせないように
無関心の波に揺られているがいい
　愛することを知る日まで。

傷つくことなき　大海原に身をまかせ
　エーゲ海に漂いつづけよ、
愛の頸木(くびき)から自由な者を
　むかえる陸地の苦しさを思え。

ミティリーニの港で
　船乗りを待ちわびる者たちに
迎えられもせず　荒波にもまれ
　漂いつづけよ。

そういえば　愛と美の女神(アフロディーテ)は
　海から生まれたという。
葡萄酒色の波のなかから
　ひとり　優美に生まれた。

かつてあなたは渡し守として
　女神を報酬なしで
力強い櫓さばきで
　向こう岸まで運び、

返礼に美を授かった ― ならば
　愛の喜びも授かろうもの。 船よ　走りゆけ！
女神を生んだ海から　愛の力を学んだら
　そのときこそ　こころ躍らせ港をめざせ。

第十四歌

Τὸ μέλημα τούμόν

いとしい娘

アッティス　いとしい娘、あなたが葦の葉しげる
小川の岸辺にわけいって　見えなくなったとき
わたしは怖くて胸がざわめいた
あなたが死ぬような気がしたから。
水の流れが静まっていた
魂が連れ去られたかのように。

そのとき　タマリスクのこまやかな枝の間から
澄んだ青い瞳がきらめいた、
わたしのためにアイリスの花を摘もうと
花咲く繁みにとびこんだのだった。
わたしは手にしていた花々を高く投げて
あなたを深くこの胸に抱き寄せた。

いとしい娘！　わたしたちの息はひとつ
昼も夜もわかつことはできない。
暁の女神がのぼるとき　ふたりはひとつの床にいる、
そばを離れないでいて　ひとときも
アッティス、わたしがあのおそろしい
死の予感におびえないように。

第十七歌

Πλήρης μὲν ἐφαίνετ᾽ ἁ σελάννα,
αἱ δ᾽ ὡς περὶ βῶμον ἐστάθησαν·

月は満ち　乙女らは
祭壇(やしろ)をめぐり　ならび立つ

A. Παρθενία, παρθενία, ποῖ με λίποισ' σίχῃ;

B. Οὐκέτι ἥξω πρὸς σέ, οὐκέτι ἥξω·

A: 処女(おとめ)の日々よ 処女(おとめ)の日々よ わたしをすてて どこに行ったのか？

B: もう二度と そなたのもとに戻らない もう二度と

月は満ち　聖なる森か
乙女らは　祭壇(やしろ)をめぐり
ならび立つ ― おそれつつ
至高の　まったき月影を
みつめて。月明かりが乙女らの
しろい四肢に　衣に降りそそぐ。
サッフォーの詩(うた)にあわせ
蒼ざめた面(おもて)をあげて
ためらいながら　ステップをふみ
しずかに流れる調べにあわせ
輪になって踊った。
くるしいほどの畏れが消えて
かろやかに舞いはじめ
きれいな声をあわせて　うたった。
やがてまた沈黙がおとずれた、
乙女らの唇はあおざめている
崇めたてるこころを秘めおかず
うちあけたことを恥じるように。
サッフォーはひとり　竪琴に触れた
あかるい響きの弦(いと)から　嘆きの調べがこぼれた。
月の女神(アルテミス)に呼びかけたが ―
だが月は雲に閉ざされていた！ ―

「わたしをすてて　どこに行ったのか、
もどっておくれ　無垢なあの頃よ！
いまもこい焦がれる　処女(おとめ)の日々よ、
いたいけな乙女を崇高にする
ひそやかに　護(まも)られた
喜びと祝福に満ちた自由の日々よ。
月よ　どうか　あの悔やまれる

わたしの情熱をしずめてくれないか
たいせつなものはただひとつ、
わたしのなかの清らかな乙女！ ― 」
サッフォーはうたったが　雲に隠れた夜空から
残酷な声がとどいた ―
「もう二度と　そなたのもとに戻らない」と。
サッフォーよ　なんという苦しみか！
おまえは　重い足どりで立ち去り
月明りに舞いうたう乙女たちも　去っていった。

第四十八歌

Ἄστερες μὲν ἀμφι κάλαν σελάνναν
ἃψ ἀποκρύπτοισι φάεννον εἶδος,
ὅπποτα πλήθοισα μάλιστα λάμπῃ
　γᾶν…
　…ἀργυρία·

さえわたる月が白銀のあかりで地上を照らすとき
星々はそのかがやく面輪をかくす

さえわたる月が
白銀のあかりで
地上と空を照らすとき
星々はその面輪をかくし
野原も　森も　丘も
まひるのように
つめたくひかる姿をみせる
闇の中から。

プレイアデスの娘たち
七つの星も消えてゆく。
婚礼の晩にほこらかに
ともる宵の明星も
しだいに見えなくなってゆく、

天空にあった
かがやく星たちも
瞬く間(あいだ)に姿をかくす。

エーリンナ　とおい昔にあなたを愛した、
ときがたつほど　なおいとおしい
夜のきよらかな満月
乙女のなかの女王、
あなたのひかりにあって
まわりの少女らの
美しさはかすみ
輝きは失せてゆく。

なぜ処女神ダイアナのように
あなたをおそれ敬うのだろう
19 年の地上の生だけで
並ぶ者なき慈悲ふかさ、
恋する者は　癒しと恵みを
もとめてやまない。
なぜ　サッフォーの涙はとめどなく
あなたの髪を濡らすのだろう

いとしい娘、わたしには
その秘密がわかる。
竪琴がうたうとき
心にある思いを
あなたは知っている、
胸にひめた願いを
誰にも明かさない誓いを
あなただけは知る。

若くして　人が心に
感じることをいいあてる、
キュプロス生まれの女神が
夢で痛みを和らげるなら

やさしい詩人のあなたは
人の苦しみを理解する。
心の傷を隠そうとしても
あなたにはわかる

それがあなたという存在を
月の高みに引きあげる。
人はそのしるしを見る、
ひととき輝いた星々が
あなたの光に照らされて
滅ぶとしても
あなたを永久(とわ)に生きる
聖なる星とたてまつる。

第四十九歌

Ὅτα πάννυχος ἄσφι κατάγρε·

夜通し眠りが乙女らの瞳を包む

わたしの愛しい乙女たちが
　床(とこ)に横たわるとき
夜通し眠りが　あの娘(こ)たちの
瞳を包み　太陽がのぼる昼には
機を織ったり
　草のうえに布を
広げたりしていた手を
優しく折りたたむとき

こんな風に乙女たちが横たわり
　幸せの夢をみるときに
黄金色(きんいろ)の時代が再び燃え上がる。
月明かりのもと
まどろむときに
　青春はとりもどす

とおい昔に消え去った
あの輝きと至福を。

かつては　眠れずに横たわっていても
　それで幸せだった！
夜がいつまでも続くようにと
願ったことすらあった、
わたしのために永く、と。
　でもいまは思い悩みため息をつく
夜が明けるまで　ともに寝息をたてる
愛しい乙女たちを見つめながら。

３．解説

『とおい昔に』より、マイケル・フィールドによる序文の後、序詩を、次に第一～七歌を翻訳した。マイケル・フィールドのサッフォーは、第一歌において乙女たちとの詩歌と愛の日々を賛美し、詩集全体の主旨をうたいあげる。その日々が今は遠いものになってしまったことは、一行のみ（line 16）で簡潔に明かされる。その後の詩編（第二～七歌）で、ファオーンに対する愛の苦しみを存分に描きだす。そこに美しい乙女の描写（第六歌）が挿入されることで、（暗い）異性愛と（明るい）乙女への愛という対比が鮮やかに浮かび上がる。そのような対比は、やがて自身の乙女の日々や、乙女たちとのつながりが、男性とのかかわり（結婚など）によって分断されてゆく、という不安につながる。その不安を表す詩編として、ここでは第十四、十七、四十八、四十九歌を選んだ。

以下、序文と各詩編について解説を付す。ギリシャ神話に関してはグラント他（1988）『ギリシャ・ローマ神話事典』、呉（1994）『ギリシア神話』、高津（1960）『ギリシャ・ローマ神話辞典』を、その他イメージに関してはド・フリース（1984）『イメージ・シンボル事典』を主に参照した。

序文

サッフォー詩断片のウォートン英訳：“And this I feel in myself”(Wharton (1920), fragment 15); “Be thyself my ally” (Wharton (1920), fragment 1). 二つの引用のうちの後者は、「アフロディーテ讃歌」として知られる、唯一完成形に近い形で残るサッフォー詩編からの引用である。

序文でマイケル・フィールドは、この詩集を編むことになった経緯を説明し、古代ギリシャ詩人サッフォーに対する敬意を明らかにする。アフロディーテ（ヴィーナス）はギリシャ神話における愛と美の女神であり、ほぼ完成形で現存するサッフォー詩編「アフロディーテ讃歌」において、サッフォーが熱心に呼びかける対象である。

タイトル頁

タイトルのギリシャ語英訳：“Long Ago” (Thain and Vadillo (2009) 57; footnote 1).

詩集の題辞英訳：“I loved thee once, Atthis, long ago” (Wharton (1920), fragment 33).

序詩

題辞英訳：“Hither now Muses, leaving golden …” (Wharton (1920), fragment 84).

詩集は古代ギリシャ詩の伝統に従い、文芸・音楽・舞踏を司る詩女神（ムーサ）たち（伝統的に 9 柱とされる）への呼びかけからはじまる。語り手（詩人サッフォーあるいはその分身）がムーサたちに対して、その住処である山を離れて降りてきて、自分に霊感を与えるようにと祈願する。なお、サッフォーは古来「十番目の詩女神（ムーサ）」と呼ばれているため（沓掛 1988: 200 頁）、詩人マイケル・フィールドが、サッフォーを含めたムーサたちに呼びかける姿も重なるかもしれない。

第一歌

題辞英訳：“But in their time they plaited garlands” (Wharton (1920), fragment 73).

詩集全体を通して、花、花輪、花冠は、乙女らが愛し、詩歌を奏でることの比喩として用いられる。花輪（garland）には古くから詩集の意もあった（*The Shorter Oxford English Dictionary*, “Garland” 4）。ウォートンは「花輪を編むこと」（“plaiting wreaths [garlands]”） は「愛することのシンボル」（a “sign of being in love”, Wharton(1920), page 93）であったと指摘する。

沓掛氏によると、サッフォーの詩において花冠をかむるのは女性の性的魅力を増す役割を担う。サッフォーは、花で身を飾ることが神々の御心にかなう、とうたう。また沓掛氏は、サッフォーの「野の花を摘むやさしいおとめを」という断片の解説において、サッフォーが女性に美しさを添えるものとして、花に深く関心を持ち花を愛していたことは、作品の随所に窺われると指摘する（沓掛 1988: 32, 59, 141, 152 頁）。

ギリシャ神話の太陽神アポロは詩歌、音楽、予言などをつかさどり、竪琴を奏でたとされる（高津 1960: 58-61 頁）。第一歌の第三連は突然、神の竪琴が「今はない」と告げ、乙女たちの愛と詩歌の世界は終わったと暗示する。その「今」はサッフォーにとっての現在なのか、それとも詩の作者マイケル・フィールドにとっての現在なのか、判然としない。『とおい昔に』は、サッフォーに成り代わった 19 世紀の詩人がうたっているため、詩の現在がどの地点に置かれているのが曖昧となる。それが詩集に一種の奥行きを与える。

第二歌

題辞英訳：“And dark-eyed sleep, child of Night” (Wharton (1920), fragment 57).

サッフォーが、愛にこたえない若者ファオーンへの恨みや嘆きをうたう。夢でもいいから彼の愛が欲しいという。「象牙の角の門」は真実の夢と偽りの夢に言及する際に用いられるイメージである。ホメロス『オデュッセイア』19, 562～によると、偽りの夢は象牙の門を通って夢の市から出ていく。予言の夢は「角の門」を通るとその通りになるという（ド・フリース 1988: 360, 341 頁）。

第三歌

題辞英訳：“Neither honey nor bee for me” (Wharton (1920), fragment 113). ウォートンによると、後世の作家たちによって、「悪いことはなく、良いことだけが起こるように」との意味で、多く引用されたフレーズだという。

語り手サッフォーは、冷たいファオーンに対する、破壊的なまでの官能的な欲望を表現する。以下、ギリシャ神話の言及やイメージについて補足する。

＊ペルセポネ（ローマ神話ではプロセルピナ）は、豊穣の女神デーメーテールの一人娘で、母によってシチリア島のニンフたちに預けられていた春と花の女神。花を摘んで遊んでいたときに、ハデスに誘拐されて冥界に連れ去られた（呉 1994: 263-77 頁）。

＊夾竹桃（oleander）は美しい花を咲かせるが、葉には毒がある。用心を表象し、この花の蜜は狂気を生むとされる（ド・フリース 1988: 469 頁）。

＊銀梅花（myrtle）はアフロディーテに関連する、聖なる花（ド・フリース 1988: 448 頁）。アフロディーテは自身が美を与えたファオーンに恋していた。

＊雛罌粟（poppy）と菫（violet）はペルセポネがハデスにさらわれるときに摘んでいた花である。雛罌粟は処女神アルテミスへの供えもので、貞潔と性欲抑制の効能があるとされる。（ド・フリース 1988: 504, 670 頁）

なお、第三歌について、Cantillo-Lucuara (2021a) による詳細な分析がある。

第四歌

題辞英訳：“And golden pulse grew on the shores” (Wharton (1920), fragment 30).

六つの整然としたカプレット（二行連句）からなる詩編。サッフォーは自分を岸辺の豆蔓にたとえて、愛するファオーンから拒絶される苦しみをうたう。そして彼を海から強奪し、蔓で絡めとり、詩人の花冠で自分の所有物にすることを想像する。絡みつく様子は、女性＝蛇（メデューサ、リリス、イヴ、サロメなど）の比喩を思わせる。金色、蔓、強奪等のイメージが、拒絶されても欲望することを止めない心の強さを際立たせる。Cantillo-Lucuara (2021b) による詳細な詩の分析がある。

なお、ここで題辞となったサッフォー詩の断片は、アテーナイオスの「エジプト豆」の項に引用されている。沓掛氏はこの豆を「えじぷと豆」と翻訳している（沓掛 1988: 60, 152 頁）。

第五歌

題辞英訳："As on the hills the shepherds trample the hyacinth underfoot and the purple flower [is pressed] to earth" (Wharton (1920), fragment 94).

ファオーンへの恨みや嘆きをうたう詩編。サッフォーは自分を、羊飼いに踏みつけられる花、ヒヤシンスにたとえる。朝生まれたばかりの花の死、という生と死の対比を語る。

第六歌

題辞英訳："A sweet-voiced maiden" (Wharton (1920), fragment 61).

エーリンナとは、ヘレニズム期の紀元前 4 - 3 世紀に生きた、実在の詩人である（沓掛 2018: 478-83 頁）。紀元前 6 - 7 世紀のサッフォーよりも後の時代に生きた詩人だが、マイケル・フィールドはこの詩において、エーリンナをサッフォーの愛する少女と仮定して描く。

オルフェウスはギリシャ神話中、最高の詩人とされる。彼が竪琴を奏でて歌うと、動物も山も草木もみな聴き惚れた。妻エウリュディケを冥界から取り戻せず、絶望のため世捨て人となった。女性を遠ざけていたため、彼に無視されたトラキアの女たちに恨まれ、八つ裂きにされた。その頭は、詩と音楽で名高いレスボス島に流れ着き、身体の断片は詩女神（ムーサ）たちが集めて、オリュンポス山北麓のピエリアに葬った（グラント他 1988: 188 頁）。ヨーロッパ文学におけるオルフェウスの諸相については沓掛（2021）『オルフェウス変幻』を参照されたい。

エウテルペは、ピエリアに住む、美術、音楽、文学の女神（詩女神（ムーサ））のうちのひとり。ムーサは伝統的に 9 柱いるとされる。エウテルペはその中で音楽の神であり、「喜び」を表し、笛を吹く（グラント他 1988: 551 頁）。最高の詩人で美しい声をもつオルフェウスの墓をまもる女神のひとりが、エーリンナの声に惹かれ、彼女の髪を花冠で飾るのは、エーリンナの詩人・音楽家としての栄誉を示す。「ピエリアの薔薇」というフレーズはサッフォー詩の断片にある（沓掛 1988: 48 頁）。

19 世紀初期、エーリンナはサッフォーと同様に女性詩人の先駆者とされた。レティシア・ランドンが詩編「エーリンナ」を発表している（Landon 1827）。エーリンナをサッフォーの弟子と仮定して描いた漫画作品に、佐藤二葉（2018）『うたえ！エーリンナ』がある。

第七歌

題辞英訳："Stir not the shingle" (Wharton (1920), fragment 114).

語り手のサッフォーは自分を岸辺に、愛するファオーンを船にたとえ、愛の心がわから

ず自分を苦しめるだけのファオーンには上陸してほしくない、とうたい始める。ギリシャ神話において、ファオーンはもともと渡し守の老人であった。海から生まれた愛と美の女神アフロディーテ（ヴィーナス）を、報酬無しで対岸まで送り届けたところ、その見返りとして、永遠の美と若さを与えられた。詩の後半では、ファオーンに対して、「女神から美を与えられたのだから、愛の喜びも授けてもらえるのではないか。女神を生んだ海を漂い続けることで、愛の心を学ぶがいい」、との主旨をうたう。

なお、ミティリーニとは、サッフォーを生んだレスボス島の港であり、首都である。「葡萄酒色の波」という詩句は、ホメロス作『イーリアス』や『オデュッセイア』で、海が何度も「葡萄酒色」と表現されていることに由来する。ヴィーナスが海から生まれたことに関連して、マイケル・フィールドは『見つめること　うたうこと』 *Sight and Song* (1892) において、ボッティチェリの描いた「ヴィーナスの誕生」について詩を書いている（滝口 2016, 2022）。

第十四歌

題辞英訳：“My darling” (Wharton (1920), fragment 126).

アッティスは、実在のサッフォーの教え子のひとりであり、サッフォーが最も愛したと推測されている少女の名である。サッフォーがアッティスをうたった詩の断片は、詩集『とおい昔に』の題名の元となった詩行を含め、いくつか現存する。「息はひとつ」という詩句は、下記の第四十九歌と同様に、愛する乙女との一体感を示す。

タマリスク（“tamarisk”）は日本名ギョリュウ。細い繊細な枝と鱗状の葉をもつ低木で、砂地に育つ（*The Shorter Oxford English Dictionary*）。「花咲く繁み」と訳出した詩句は、原詩では“galingale and celandine”である。前者は蚊帳吊草（かやつりぐさ）、後者は greater celandine であれば四つの花弁と二つの萼（がく）をもつ黄色の花を咲かせるクサノオウ、lesser celandine であれば、黄色の花を咲かせるキンポウゲ科の植物のことである。（*The Shorter Oxford English Dictionary*）。第十四歌は、多くの花の名を挙げることで、岸辺の植生の豊かさと、詩人たちが花摘みに熱中する様子を伝える。

第十七歌

題辞英訳：“The moon rose full, and the women stood as though around an altar” (Wharton (1920), fragment 53).

“A: Maidenhood, maidenhood, whither art thou gone from me?

B: Never again will I come to thee, never again.” (Wharton (1920), fragment 109)

上記サッフォー詩の断片二つのうち最初のものは、満月の夜に行われる、少女たちによる祭儀の様子をうたったものと推測される（沓掛 1988: 143 頁）。満ちていく月、満月、欠けていく月は、女性、処女性を象徴する。月の女神アルテミスは処女神である（ド・フリ

ース 1988: 436 頁)。二つめの断片は、サッフォーによる祝婚歌の断章と見られており、婚礼の宴席で、処女の純潔を称える少女たちによって合唱されたと推測される(沓掛 1988: 71, 164-65 頁)。マイケル・フィールドはサッフォー詩の断片二つをつなぎ合わせ、サッフォーが異性愛を経験し、無垢な少女時代を失った悲しみを描く。

なお、古代ギリシャでは女性の一生は女神たちの諸相に映し出されていると考えられていた:少女時代は処女神の月女神(アルテミス)、若い未婚女性は美の女神(アフロディーテ)、妻の時代は天界の王妃で結婚の守護神ヘーラー、母の時代は大地母神(デーメーテール)(Rayor 2023: 9)。

第四十八歌

題辞英訳:"The stars about the fair moon in their turn hide their bright face when she at about her full lights up all earth with silver" (Wharton (1920), fragment 3).

愛するエーリンナを月、それ以外の乙女たちを星にたとえて、エーリンナを聖なる詩人として褒めたたえる。「とおい昔にあなたを愛した」とあるのは、詩集のタイトル頁に引用したサッフォー詩の断片(そこではアッティスへの呼びかけ)と呼応する。エーリンナはわずか 19 歳で夭折したと伝えられる(沓掛 2018: 478)。

昴(すばる)星団として知られるプレイアデスは、ギリシャ神話でアトラスの 7 人の娘たちをさす。彼女たちはゼウスによって星に変えられた(グラント他 1988: 445 頁)。宵の明星は、原詩では Sweet Hesperus (美しいヘスペロス)。ヘスペロスはアトラスの息子で、父の山アトラス山から風にさらわれて天の星になった。金星のことである(グラント他 1988: 459 頁)。

「キュプロス生まれの女神」(Cyprus' Daughter)は美の女神アフロディーテをさす。アフロディーテは海で生まれてキュプロス島に流れ着いたとされ(グラント他 1988: 56 頁)、別名キュプリス(キュプロスの女神の意)という。サッフォーの断片に、「キュプロス生まれの女神さま / 夢のなかでわたしは[あなたと]お話したもの・・・」という詩行がある(沓掛 1988: 13)。

第四十九歌

題辞英訳:"When all night long [sleep] holds their [eyes]" (Wharton (1920), fragment 43).

詩の語り手サッフォーはかつて、眠る乙女たちの安らぎと自分の青春の夢を重ね合わせ、幸せを感じていたという。今のサッフォーからその幸せを奪い、彼女を思い煩わせるものは何か。

乙女たちとの一体感を「息」で表すイメージは、第十四歌の詩句「わたしたちの息はひとつ」と通じる。

注

[1] 和歌山大学非常勤講師。

[2] 筆名 Michael Field は、Bradley と Cooper がプライベートでも使っていた、二人のニックネームを合わせたグループ名である。そのため、ラスト・ネームのみの Field ではなく、フルネームで Michael Field と記される慣例がある。Bradley と Cooper やその友人は The Michael Fields と表記することもあった。Katharine の綴りについては、資料により e を用いた Katherine の綴りも見られる（Stetz & Wilson 2007, pp. 7, 23-27）。ここでは a の綴りを採用した。なお、Bradley と Cooper は、*Long Ago* 出版以前に Michael Field 名義で劇詩をいくつか出版している。二人の簡易年表を参照（Thain and Vadillo 2009: 15-16）。

[3] アルジャーノン・チャールズ・スィンバーン（Algernon Charles Swinburne, 1837- 1909）が『詩とバラッド』（*Poems and Ballads* I, 1866）において、サッフォーへのオマージュとして "Anactoria", "Sapphics"を発表したが、その性的な内容は、タブーに踏み込んだとしてセンセーションを巻き起こしていた（Prins 1999, 112）。

参考文献

沓掛良彦 （1988） 『サッフォー 詩と生涯』 平凡社

----------. （2000） 「サッフォー」 （沓掛良彦編『詩女神（ミューズ）の娘たち ― 女性詩人、十七の肖像』未知谷（出版社名）7-33 頁に掲載された、沓掛執筆のエッセイ）

----------. （2018） 『ギリシアの抒情詩人たち ― 竪琴の音にあわせ』 京都大学学術出版会 （127-72 頁に「サッフォー」の章、478-83 頁に「エリンナ」の節がある。）

----------. （2021） 『オルフェウス変幻 ― ヨーロッパ文学にみる変容と変遷』 京都大学学術出版会

グラント、マイケル、ジョン・ヘイゼル共著（1988） 『ギリシャ・ローマ神話事典』西田実主幹 大修館書店

呉 茂一 （1973） 『花冠 呉茂一譯詩集』紀伊國屋書店（191-228 頁にサッフォー詩編）

----------. （1994） 『ギリシア神話』 新装版 新潮社

佐藤二葉 （2018） 『うたえ！エーリンナ』 星海社

高津春繁 （1960） 『ギリシャ・ローマ神話辞典』 岩波書店

滝口智子 （2010a） 「サッフォーと十九世紀英国の女性詩人たち（１）身投げ伝説と女性の死」『経済理論』353 号 和歌山大学経済学会 91-105 頁

----------. (2010b) 「『とおい昔に』― 十九世紀のサッフォー研究とマイケル・フィールド」『文学とサイエンス　英米文学の視点から』所収 英潮社フェニックス 149-66 頁

----------. （2016） 「マイケル・フィールドのエクフラシス詩四編『見つめること　うたうこと』より ボッティチェリの絵画に寄せて」 『文学と評論』第 3 集第 11 号 61-70 頁

----------. （2022） 「ペイターとマイケル・フィールド ― エクフラシスと贈与交換の系譜 」 『文学と評論』第 3 集第 15 号　33-44 頁

ド・フリース、アト （1984）『イメージ・シンボル事典』山下主一郎主幹、荒このみ他共訳　大修館書店

Bauer, Pearl Chaozon. (Winter 2018/19). "Michael Field's 'New Woman' Epithalamia of Long Ago". *The Latchkey* Vol. X　Url: http://www.thelatchkey.org/Latchkey10/essay/Bauer.html

Cantillo-Lucuara, Mayron Estefan (2018) "Michael Field's Sapphism: An Ontology of The Feminine in *Long Ago* (1889)". *Lectora*, 24: 205-222.

----------. (2021a) "Sappho, Hegel and Michael Field: Paradox and Desire in Lyric III". Philologica Canariensia 27, 49-63.
Url: https://ojsspdc.ulpgc.es/ojs/index.php/PhilCan/article/view/1304/1282

----------. (2021b) "Sappho in Lyric IV: Michael Field's Spatial Poetics of Desire and Defeat". *Miscelánea: A Journal of English and American Studies*, Vol. 63, 95-109.
Url: https://papiro.unizar.es/ojs/index.php/misc/article/view/5874

Faderman, Lilian. (1985) *Surpassing the Love of Men: Romantic Friendship and Love Between Women from the Renaissance*. Women's Press.

Field, Michael. (1897) *Long Ago*. Portland, Me: T. B. Mosher. (Limited to 925 copies)

Field, Michael. (1889) *Long Ago*. London: George Bell and Sons, 1st edition.

Field, Michael. (1892) *Sight and Song*. London: Elkin Mathews and John Lane at the sign of the Bodley Head.

上記二点の資料（1889, 1892）はオンライン上でテキストの閲覧が可能である。オンラインのウェッブサイトの制作は Sarah E. Karsh, Georgia Christman, Kathleen Jarman, and Sai Grandhi による。2023 年 1 月の時点で *Sight and Song* はすべての詩に、*Long Ago* は第 15 歌までの詩に、注釈が施されている。
Url: https://michaelfield.dickinson.edu/longago

Landon, Letitia Elizabeth. (L.E.L.) (1827) "Erinna". In *The Golden Violet with its Tales of Romance and Chivalry and Other Poems*. London: Longman, Rees, Orme, Brown and Green, 241-68.

Powell, Jim. (2019) *The Poetry of Sappho: Translation and Notes by Jim Powell.* Oxford UP. The revision of the first edition in 2007. Expanded edition, Featuring Newly Discovered Poems.

Prins, Yopie. (1999) *Victorian Sappho*. Princeton: Princeton Univ. Press.

Rayor, Diane J. and Andre Lardinois. (2023) *Sappho: A New Translation of the Complete Works*.

Cambridge UP.

Reynolds, Margaret. (2000) *The Sappho Companion*. New York: Palgrave.

Stetz, Margaret D. and Cheryl A. Wilson, eds. (2007) *Michael Field and Their World*. High Wycombe: Riverdale Press.

Thain, Marion and Anna Parejo Vadillo, eds. (2009) *Michael Field, The Poet: Published and Manuscript materials*. Broadview Press.

Wharton, Henry Thornton. (1920) *Sappho: Memoir, Text, Selected Renderings and a Literal Translation*. New York: Brentano's. (1st edition was published in 1885)